パーゼット氏病の 1 例

日本医科大学皮膚科教室 (主任 丸山千里教授)

原 田 誠 一
Seiichi Harada
新 田 踔 男
Takuo Nitta
小 川 浩
Hiroshi Ogawa

緒 言

Paget 氏病は Bowen 氏病とともに癌前駆症の代表的なものとして現在まで屢々報告されている。従つて敢て珍らしいものではないが、我々は本症の 1 例を多年に亘つて観察することができたのでこゝに述べようと思う。

症例

患者：■■■■ 74 才男

家族歴：父方及び母方の祖父母に特記すべきことはない。父、母は既に死亡したが、いずれも長命で、遺伝性の疾患はなかつたという。同胞、配偶者、子等に特記すべきことはない。

既往歴：幼時より頑健であつた。52 才の時肺炎カタルの診断の下に約 1 年間治療を受けたことがある。

現症歴：昭和 16 年 7 月奉天—新京—チ、ハル等に旅行をした。チ、ハルの宿で陰部に湿潤性の発疹に気付く、チ、ハル国立病院にて受診、外用薬 (グリテール?) を投与され 1, 2 回の塗布によつて病巣は治癒した。

昭和 16 年秋頃再び前記部位に同様の発疹を生じたので医療を求め外用薬 1, 2 回の塗布によつて治癒した。しかししばらくして同部位は再び湿潤してきた。昭和 16 年の暮になつても発疹は治癒しなかつたが放置しておいた。帰国後昭和 17 年都立某病院を訪れ、軟膏を投与され自宅治療をつづけていた。病巣は徐々ではあるがやゝ拡大する傾向を有していたという。一時治療をやめた後昭和 20 年になつて又治療をつづけたが、病勢は一進一退であつた。昭和 22 年から昭和 23 年にかけて都立某病院にてレ線治療を受け非常に軽快した。しかし治療をやめると症状は増悪したので又レ線治療を受けた。このような状態を数回繰り返したが根治するに至らなかつたので、又某都立病院にて軟膏療法を受けたが、一向に軽快せず、かえつて病勢

は増悪してきた。かくして患者は病院を転々として、昭和 27 年当院外来にて受診、種々検索の結果、Paget 氏病の診断の下に、同年 6 月入院、病巣切除第 1 回を行つた。その後の経過は良好であつたが昭和 28 年夏頃より再び発疹発生し、病巣の拡大をきたした。陰囊、陰茎、下腹部に及んだので、第 2 回の皮膚切除を行うことにした。但しこの時は病巣広範囲のため、陰茎切断及び去勢術を施行せざるを得なくなつた。昭和 29 年 2 月手術施行。その後も小病巣の出現をみたので、さらに昭和 33 年 3 月、34 年 4 月と前後 4 回の手術を行つている。今回も 1, 2 カ月前より下腹部に 2 カ所発疹の出現を認めたので来院したものである。

現症：体格、栄養中等度、顔貌、筋肉の発達に異常なく、発熱はない。血圧 158/54、眼粘膜、耳、鼻等にも異常を認めない。内科的には動脈硬化、大動脈閉鎖不全がある。本院内科の検査によれば、便に潜血反応、ベンチジン (++)、グアヤック (+)、寄生虫卵陰性、尿に異常なく、その他血清蛋白 7.4 g/dL, B.S.P 5% (45 分) T.T 1 単位、黄疸指数 5、眼科では Angiosclerosis retinae があるという。眼底血圧 51/21、血液所見、赤血球 335×10^4 、白血球 900、血色素量 11.2 g/dL、血漿比重 1.030、血液比重 1.052、ヘマトクリット 33%、梅毒血清反応 陰性。

局所々見：陰部は陰茎切断及び去勢術を施行してあるために尿道は癒痕中にかくれ、病巣切除に伴う皮膚の移動によつて下腹部は複雑な所見を呈している。即ち下腹部左側に手掌大の色素沈着部があり、こゝは病巣切除後陰囊皮膚を引きよせたところである。この色素沈着部の周辺上方斜に巾 0.5 cm、長さ 2 cm 大の病巣があり、紅色～褐色を呈し、落屑を伴っている。硬度は健常皮膚に等しく、自覚的には軽度の癢痒感を伴うのみで圧痛、自発痛はない。又湿潤する傾向もみられない。同様の病巣が左大腿内側にも 1 カ所残

写真 1.

存している(写真1)。

手術: 18/IV-1960 新生した病巣 2 カ所を切除し簡単に手術を終えた。

病理所見: 甚だ定型的な Paget 氏病であつて、特長のある大きな Paget 細胞が表皮殊に有棘層に多数存在する。mitose の像も少しく認められる。真皮の上層には瀰漫性にリンパ球及びプラマス細胞の浸潤がある(写真 2)。

考按

本症は 1874 年 Paget が乳房に湿疹様変化をもつて発生し、後にその部に癌の発生した症例について報告したのに始まり、Darier Wickham 等によつて組織所見が明らかにされた。その後本症は乳房部のみならず、身体他部にも発生するという報告が屢々なされるに及んで、本症の侵襲する範囲が拡大した。即ち 1888 年 Crocker は会陰部、殿部、肛門等に発生した

写真 2.

本症を報告し、爾来身体各部についての本症が多数報告されている。しかしながら、乳房外の本症は外陰部及びその附近が最も多く、なかんずく男子陰部 Paget 氏病として本邦では坂本¹⁾は 50 才(男子)の患者で 13 年前より発病し、左側陰囊に扁豆大の発赤湿潤せる皮疹を生じ漸次拡大し軽度の疼痛と痒痒があり、診断確定以前は湿疹として加療されていた例、遠山²⁾は 56 才の患者で陰茎背面冠状溝を中心に亀頭及び包皮内面を侵し、本症発生前その部に約 20 年前から、数回アンチピリン固定疹を発生していた興味ある例をあげ、佐藤³⁾は 71 才の患者で、陰囊の左上部陰茎根部に近く紅斑を生じ、湿潤し種々の治療に抵抗し、自覚的には痒痒のみある例を、又佐藤⁴⁾は 66 才の患者で 10 年前より陰囊下部に発症、湿潤し硬度やゝ硬く 5 年前より鼠蹊部淋巴腺腫大し、陰茎は亀頭以外全面的に、かつ陰囊及び陰阜の有毛部に鮮紅色の糜爛を形成し、加えて所々に痂皮を有し、落屑を伴う例を、遠山⁵⁾は 66 才の患者、5 年前に発症、病巣は陰囊に生じ、湿疹の診断の下に種々治療を受けたが寸効なく、ついに陰囊のみならず陰茎、鼠蹊部、下腹部にも及んだ例、石田⁶⁾は 74 才の患者、包皮縁より初発、陰茎、陰囊に拡大し、亀頭も侵され、刺痛及び痒痒ある例を、山本、西山⁷⁾は 73 才の患者、陰囊に褐色の腫脹と強度の痒痒及び湿潤があり徐々に拡大、かつ肝臓癌を伴つた例をそれぞれあげている。

三浦⁸⁾は 68 才の患者、右鼠蹊溝の本症より同側上腿に転移を来し、鐮状瘤を形成した例を報じ、組織的に脂腺癌であつたと述べている。柳原⁹⁾は 63 才の患者、6 年前より外陰部全般にわたり、極めて難治の発疹を認め本症であることを確め、青木¹⁰⁾は 65 才の患者、外陰部 Paget 氏病で既に癌変性を起した症例、田中、石田、渡辺、熊本¹¹⁾は 68 才の患者、42 才の時に左睪丸肉腫で除睪術を受け、47 才の頃陰部湿疹で加療、ついで Paget 氏病と確定され、股腺、腹膜に癌細胞の浸潤強度であつた例を報じている。

即ち本症はいずれも高令或は高令に近く発見され、発病は初診より数年~10 数年以前にさかのぼる。多くは初め湿疹として加療されているが、淋巴腺の腫脹は必発のものではない。病理組織学的には本症が癌と密接な関係ありとするもの、即ち深部の癌が排泄管を伝つて表皮を侵し、こゝに本症が発生するとす

るものと、表皮に本症が原発するものとの2つの見方がある。藤田¹²⁾はこれに関し興味ある症例を報じている。即ち 49 才の農婦、右乳房部の糜爛で、組織的に Paget 氏病の診断が下されたものであるが、Paget 細胞は本来細胞間橋のないのが特長であるけれども、この症例において Paget 細胞は明らかに細胞間橋を有し、さらに上皮線維が周囲の有棘細胞より本細胞中に入り込んでいる所見がみられた。かかる所見よりすれば、表皮性の Paget 氏病も少くはないものであろうと述べている。又所謂 Paget 氏病といわれるものに2種類があつて、その1つは広く認められているところの乳腺、乳管元性、若しくはアポクリン腺元性のものであるが、これに対しマルピギー細胞元性のものも存在すると考えたいと述べている。我々の症例においては、深部に癌性変化は現在まで認められず、病巣としては良好な経過をとり、数回にわたる皮膚切除によつて治癒の状態となつている。たゞし Paget 細胞は病巣のみならず、その周囲の一見健康な皮膚にも遊走する可能性があるといわれているので、病巣切除に当つては可及的広範囲に手術を行うべきであらう。なお我々の症例では Paget 細胞には細胞間橋の伴つた所見は得られなかつた。

結 語

1) 我々は約 14 年間にわたる長き経過を有する Paget 氏病の1例について報告し、諸家の症例を加えて考察を試みた。

2) 我々の症例に於ては Paget 細胞には細胞間橋は認められなかつたので、乳管元性のもと考えられる。

3) 我々の症例ではその治療にあたつて、皮膚切除を数回施行したが、手術の際は可及的、広範囲に切除することが望ましいと思われる。

文 献

- 1) 坂本 稔：日皮会誌，**21**，719 (1921)
- 2) 遠山郁三：日皮会誌，**44**，327 (1938)
- 3) 佐藤 誠：日皮会誌，**35**，216 (1934)
- 4) 佐藤 誠：日皮会誌，**30**，382 (1930)
- 5) 遠山郁三：日皮会誌，**30**，869 (1930)
- 6) 石田孝士：日皮会誌，**30**，255 (1930)
- 7) 山本 弘，西山敬三：日皮会誌，**33**，95 (1933)
- 8) 三浦 修：日皮会誌，**46**，298 (1939)
- 9) 柳原正志：日皮会誌，**67**，786 (1957)
- 10) 青木 寛：日皮会誌，**97**，790 (1957)
- 11) 田中 宏，石田 啓，渡辺修作，熊本栄一：日皮会誌，**64**，335 (1954)
- 12) 藤田幸雄，広根孝衛，松本鏡一：日皮会誌，**67**，838 (1957)